

# 音楽科における指導力の向上をめざした効果的な教育実習 のあり方に関する研究

— 生徒指導と教科専門の観点から —

増井知世子 原 寛暁 松前 良昌 光田龍太郎  
泉谷 正則 三村 真弓 伊藤 真 枝川 一也

## 1. 研究の背景と目的

中央審議会は、「今後の教員養成・免許制度のあり方について（答申）」（平成18年7月11日）において、教職課程の質的水準の向上を図るために、教育実習の改善・充実の必要性を示唆した。そのなかでは、「大学の教員と実習校の教員が連携して指導に当たる機会を積極的に取り入れることが必要である。また、実習校においては、基本的に複数の教員が協力して指導に当たる必要がある。」と述べられている<sup>1)</sup>。

広島大学教育学部中等音楽科教員養成課程の実習先である附属学校は4校ある。教育実習生は、そのうちの2校に実習に行くことになっている。4附属学校、すなわち附属中・高等学校、附属東雲中学校、附属三原中学校、附属福山中・高等学校は、これまでに様々な学部附属共同研究を行ってきたが、教育実習に関して連携したことはなかった。各附属学校の音楽科は、それぞれ独自の特色をもっている。その特色を生かしつつ、9月実習と10月実習を円滑に、かつ有効に繋ぐ必要があるのではないかと考えた。そこで本研究では、4附属学校音楽科教員と大学教員の連携により、音楽科教員養成課程の教育実習生の指導力の向上をめざすうえで、効果的な教育実習はどのようにあるべきなのかを明らかにすることを目的とする。

広島大学教育学部第四類音楽文化系コースでは、学生の音楽科教師としての資質・指導力向上のために、さまざまな試みを行ってきた。教材研究の方法、学習指導案の書き方、模擬授業等の充実を図るなかで問題となったのは、生徒理解・生徒指導の観点の不足である。大学の授業のなかで、これらの観点を意識した指導案の作成や、模擬授業の実践を行った結果、教職や教科教育の視点からの改善は見られたが、一方で教科専門の内容の深まりがなくなるという傾向が見られ

た<sup>2)</sup>。これが、大学の音楽科教員養成課程における現在の課題である。  
(三村真弓)

## 2. 研究の概要

附属4校の音楽科授業の形態や実習スタイルは、後述するようにそれぞれ特色をもちながら異なっている。本研究の要点は、従来の各校での実習スタイルを保ちながら、本稿のサブタイトルに掲げた2つの観点を加えたことである。すなわち、①生徒の学習意欲を高めることができたか（生徒指導・生徒理解の観点）と、②音楽の授業の質（クオリティー）は高いものであったか（教科専門の観点）である。以下に、研究の流れと、具体的に上記①②の観点を実習指導にどのような形で盛り込んだかについて説明する。

### (1) 4附属教員および大学教員による研究会議

9月初旬に、広島大学において、4附属教員と大学教員が集まり、研究打ち合わせの会議を行った。諸事情により、全教員が出席しての会合にはならなかったのは残念であったが、各校での実習の様子を附属教員間で話したのは初めてで、とても有意義であった。上記①②の観点について共通理解をし、それらの観点をふまえた研究の流れを確認して会合を終えた。

### (2) 9月実習および10月実習における教育実習指導 研究の要点

#### 1) 教育実習アンケート（実習生自身による事前・事後自己評価）

アンケートは2種類で、1つは「音楽科に固有の教師力」に関するもので、もう1つは「教師力全般」に関するものである。実習生は9月実習の初めと終わりに自己評価を行い、10月実習の際に附属教員に提出する。そのことによって、附属中・高等学校と附属三原中学校、附属東雲中学校と附属福山中・高等学校の指

導教員間で、10月班の各実習生の特性を把握できるようにした。そして10月実習の初めと終わりに同じアンケートで自己評価を行い、それを大学教員に提出する形とした。

アンケートの内容は、これまで附属東雲中学校が独自に作成していたものをもとに、研究プロジェクトの全員で意見を交換し合って練り直した。「音楽科固有の教師力」は、領域を〈表現・歌唱〉〈表現・器楽〉〈鑑賞〉とし、各領域につき6～9の内容から成る。例えば〈表現・歌唱〉領域の内容は以下の①～⑨である。

- ①歌唱に興味・関心をもたせるとともに、意欲的に取り組ませることができた。
- ②楽曲をどのように歌うかについて思いや意図をもたせることができた。
- ③音楽を形づくっている諸要素を理解しながら歌唱させることができた。
- ④歌唱の基本的な技能を身につけさせることができた。
- ⑤歌唱の基本的な技能を生かして、楽曲にふさわしい音楽表現を工夫させることができた。
- ⑥楽曲の美しさや価値を感じさせることができた。
- ⑦楽曲について、十分な教材研究を行うことができた。
- ⑧教師の一方的な説明でなく、生徒の反応や状況を見ながら、適切な助言（内容、量、タイミング、対象など）をすることができた。
- ⑨指示・説明（発声指導、範唱、指揮など）を適切に行うことができた。

以上の各内容について、「できた」～「できなかった」の5段階で自己評価するようにした。

〈教師力全般〉の内容は以下の①～⑭である。

- ①教科内容の知識・理解
- ②実技などの技能
- ③積極的に生徒とかかわる意欲
- ④生徒とのコミュニケーション力
- ⑤指導教員とのコミュニケーション力
- ⑥授業を企画する力
- ⑦授業のための技能（板書など）
- ⑧生徒理解（生徒の理解状態や考えなど）
- ⑨実際の授業で臨機応変に対応する力
- ⑩問題行動を起こす生徒へ対応する力
- ⑪授業を評価する視点
- ⑫授業の反省・評価を活かす意欲
- ⑬実習の達成目標（高めたい力など）
- ⑭着実に勤務する自信

以上の各内容について、「ある」～「ない」の5段階で自己評価するようにした。

## 2) 授業評価カード（生徒による授業評価）

これも東雲附属ですでに実践されているものを参考に、各授業の終わりに、実習生の授業の良かった点と改善してほしい点について生徒に評価させるようにした。評価カードの大きさはB4用紙を8等分したもので、書式は各附属で自由とした。これは、授業評価に多面性と客観性をもたせる意味で有効と考えた。

## 3) 自己評価シート（授業後の批評会時に整理して記入するもの）

これは、本研究の最初の会議の場で意見が出たものであるが、附属中・高等学校のみが実践したのものとして紹介する。授業観察をする実習生は、観察録に記入する際に、本研究の2観点である、①生徒の学習意欲を高めることができたか、②音楽の授業の質は高いものであったかに関連すると考えられる事項にマーカーをつけておき、批評会の際にその観点にも言及する。指導教員も同様のことを行う。助言を受けた実習生は、自己評価シートに、上記①②の観点別に授業反省をまとめる。実習終了後、大学において、実習最終時に録画した自分の授業と生徒による授業評価カードと自己評価シートを見て総括を行う。これについては、本年度は必ずしも全附属で実践することができなかったが、来年度の課題としたい。

## 4) 大学における事後指導

これは従来どおり大学のカリキュラムとして行うものであり、本研究の一環として位置づくものであるが、本研究の分析と考察の対象とはしないため、詳細は割愛する。  
(増井知世子)

## 3. 各附属における音楽科の特色と実習指導の実際

附属中・高等学校では、教科実習とHR配属実習との2本柱での教育実習が行われている。HR学級運営のスタイルは担任のカラーがあり様々であるが、概ね生徒達と積極的に関わらせるような方針をとっている。学級運営と教科授業とは車の両輪のようなもので密接に絡んでいるため、常に学級・学年との連携を密にすることと、色々な生徒達の側面を観察することは、教科指導そのものにも大いに役立つことを、実習生に伝えている。本校では、通常の合唱活動や鑑賞だけでなく、授業の中で器楽活動を大きく取り上げているため、ピアノの伴奏や歌唱の技術だけでなく器楽指導のノウハウ（各楽器の基本的な演奏技術や指導法、合奏指揮指導法など）も必要になってくる。実習生は教育実習を通して、生徒達との関わり・生徒の反応から大いに学び、短い実習期間中に指導技術が格段に向上していく。指導案に縛られ生徒達の反応に対応しきれない状態から、生徒を視野に入れ具体的な評価が出来る

ようになっていくようである。授業運営に協力的なクラス、そうでないクラスと実態は様々であるが、概ね授業者の指導技術向上に伴ってクラス実態も良い方向に変化していく。(原 寛暁)

附属東雲中学校は、いわゆる校則はなく、東雲憲章に基づいて、自分たちで考えながらすすんでいけるような日々の教育を推進している。この生徒の姿を肌で感じてもらうため、教育実習期間中は、昼食・学級活動・部活動など、出来る限り生徒と関わる時間を多くもつようにしている。

教育実習期間は、校内合唱コンクールの取り組み期間と一致しているため、授業は合唱の授業一色となる。実習生には、授業におけるパート練習や全体指導だけでなく、放課後の学級での練習にも関わらせている。

放課後に2・3年生が1年生を指導するなど、長年の取り組みの中で音楽科と生徒指導部が連携して積み上げてきたものがあるため、生徒が歌う楽曲は、一般の中学校に比べて難易度が高く、楽曲分析も深く掘り下げている。そのため、教師には音楽的に高い技能が必要となる。当然のことながら、実習生にも指揮・発声・楽曲分析など、様々な音楽的スキルが要求される。また、生徒は真剣に合唱に向き合っているからこそ、実習生の指導力についてシビアな要求をしてくることもある。(松前良昌)

附属三原中学校は、教科指導だけでなく掃除や学級活動や部活動などでの指導も経験させるような実習を行っている。そのような環境の中で、実習生には積極的に生徒に声を掛けて教師という立場から指導をすることが求められる。授業時数が少ないなかでできるだけ多くの経験ができるよう、合唱と器楽の実習授業ではT1を中心としながら全員でパート指導や個人指導を行うようにしている。ある学年は合唱、ある学年は箏といったように実習期間を通して1つの単元を実施することで、実習生はお互いに学習の状況を連携しながら、繋がりをもって学習が深まっていくような授業づくりを経験している。鑑賞については、民族音楽や音楽史など、ある程度広い範囲から、自分で焦点を絞って授業づくりをさせることが多い。実習生は、生徒に何を感じさせたいのか、その為になどどのような手立てをとるのかなど、一から授業を開発することになる。これによって、音楽を深く分析してそれを教材に変え、手立てを工夫するといった鑑賞の指導力をつけることができると考えている。(泉谷正則)

附属福山中・高等学校では短い教育実習期間の間にさまざまな経験ができるよう、また実習生が採用試験や現場に出たときに困らないような指導を心がけてい

る。中学校の授業では毎時間、表現(歌唱・器楽)、鑑賞をバランスよく取り入れ、1つのことをじっくり掘り下げるといったよりは、それぞれの分野で指導計画に応じて継続的に内容を積み重ね、深めていく方法をとっている。従って綿密な指導案作成が必要とされ、実習生は教材研究や実技練習と並行して教員とのやりとりを重ねながら指導案を練っていかなくてはならない。一方高校では、系統性をもたせることは中学と同様だが、さらに音楽史の流れに沿って歌唱・器楽・鑑賞を互いに関連させながら授業を行っている。そのため時代背景や時代様式、さらには作曲家や楽曲に対する幅広い知識と教材研究が必要とされる。また、高校では当然であるが歌唱やリコーダー、ギターの実技レベルがかなり高くなるので、実習授業までに「範唱」や「範奏」の域に達していない実習生には、さらに練習を積み重ねて授業に支障が出ないように指導している。

附属福山中・高等学校では学校の方針として、授業やHR活動以外の場では積極的に実習生が生徒と関わらないような指導をしているため、ややもすると実習生が授業中に生徒の反応やサインを見落したり、発問が少なく一方通行的な授業になったりすることがある。そのような授業の中での生徒とのコミュニケーション能力は、先に附属東雲中学校で実習を経験した実習生の方が優れているように思える。それは学校挙げての態勢のもと、合唱指導などで積極的に生徒と関わってきた成果であろう。(光田龍太郎)

#### 4. 実習生の「振り返り」からみる教育実習の効果

実習生には、教育実習終了後に、①実習校の特色、実習校で感じた苦労、②9月実習での課題を10月実習にどのように生かすことができたか、③実習感想カード(生徒からの評価コメント)がどのように機能したか、の3点についてワークシートに記述させた。①に関しては、前述したように、実習校4校の教育方針、教育実習方針は様々である。実習校の組み合わせ、また順番の違いによっても、課題や成果は異なる。ここでは、各人の自由記述から、それぞれの実習グループごとの特徴を見いだしたい。一方、③に関しては、実習先に関わらず共通の利点が見られた。

##### (1) 9月実習から10月実習へと生かされたこと

以下に、実習グループ別の自由記述をまとめる。

##### 【附属中・高等学校→附属三原中学校】

- ・生徒を飽きさせないために、生演奏や視聴覚教材を用いることが効果的であるとわかったため、10月実習ではそれらを用いてどのような工夫ができるのかを実践した。
- ・9月実習の間に課題を多く見つけて実習グループで意見を出し合い、課題点を克服できるようがんばった。学校

が変わっても大事なことは生徒理解で、日によって、クラスによって、変化する目の前の生徒をいかにすばやく察知して対応していくかということが求められた。

- ・9月実習では、説明が長くなり過ぎたり、指示が曖昧でポイントを絞って話すことができなかつた。また一度に多くのことを求めすぎてしまい、生徒に達成感を感じさせることができなかつた。10月実習では、要点を抑えた指示をするよう心がけ、説明も簡潔にまとまるよう留意した。生徒が活動のなかで、楽しさや達成感を感じられるよう、活動の時間を充実させるようにした。
- ・9月実習では、生徒に多く活動させることを重視した。10月実習でも実践したところ、「たくさん弾けてよかった」などの感想をもらえ、手ごたえを感じた。
- ・まず初めにほめるということ。全体を見る目と個人を見る目を両方もつこと。授業以外でなるべく生徒と関わること。

#### 【附属三原中学校→附属中・高等学校】

- ・9月実習ではその場で生徒の様子を見ながら適した指導をするということができなかつたが、10月実習では授業回数を重ねたということもあり、少しはできるようになった。
- ・9月実習のなかでは、生徒の反応を十分に見ることができず、それに対応できていないという課題があった。その反省を生かし、10月実習では、全員がこちらを見てきちんと指示を聞いているか、意図が伝わっているかを気にするように心がけた。
- ・「やる気のない生徒にどう対応するか」ということが模索中のまま、9月実習を終えてしまったため、そこを課題とした。10月実習では、「やる気のない生徒への対応」は、自分なりに考えたり、先生の授業を見たりすることで、少し答えが出たように思う。
- ・9月の実習では、とにかく授業規律を保つことに注意がいき、授業を楽しめるものにできなかつたので、10月実習では、生徒を楽しませるために、まず自分が楽しんで授業を行うように心がけることができた。

#### 【附属東雲中学校→附属福山中・高等学校】

- ・9月実習では、どうしても授業の流れを意識してしまい、生徒とコミュニケーションをとれず、一方的に進めてしまうことが多かったので、10月実践では、生徒とのコミュニケーションを大切にしながら、目線や声の大きさを意識して取り組むことができた。
- ・9月実習では、生徒とよく関わることもできたため、10月実習では、生徒への切り返しの引き出しを生かすことができた。
- ・教師としての振る舞いに関して、自分のくせを9月で発見できたので、そこは気をつけながら授業ができたと思う。9月実習での反省点では準備不足が1番にあったので、10月実習では教材研究をしっかり行い、授業に望んだ。指導案の重要性を感じた。
- ・9月実習では、範唱や指揮の大切さを学び、10月実習の授業でも生かすことができた。
- ・9月実習では、話す内容が長引いたり、口調がきつくなってしまうことが多かったが、10月実習では、それを意識して授業を行うことができた。
- ・淡々と授業（指導）を進めるのでは生徒はなかなかついてきてくれないし、退屈だと思ってしまう、ということを経験して学んだ。授業をするには、まず生徒の自主性を引き出すべきで、さらに、きちんとした理解につなげなければならない。技能だと、1つでも「できる」ようにしなければならない。10月実習では、この点を重要視し、できるだけ楽しい授業、分かりやすい授業になるよう、指導案づくりに励み、実践することができた。

#### 【附属福山中・高等学校→附属東雲中学校】

- ・9月実習では、事前に指導案を綿密に確認し、そのとおり進めることばかり頭に置きながら授業を行ったので、生徒の学習状況に臨機応変に対応することがあまりできなかった。一方10月実習では、本時でする内容をだまかに頭に入れておいて、どこにどれくらい時間をかけるか、反復させるかを、生徒の様子を見ながら判断することができた。また注意を集める方法（声のトーンや声のかけ方、表情等）について、9月実習で学んだことを10月実習でも生かすことができた。
- ・9月実習では、授業のなかで目的を絞れず、あれもこれもと教えてしまっていたが、10月実習では、授業のなかで身につけてほしいこと（目標）を1つに絞り、目標を達成できるような授業計画をした。
- ・9月実習では、教材研究の大切さを実感し、また生徒をよく観察し、生徒の実況に応じて授業を進めることが重要であるとわかった。10月実習では、教材についての自分なりの解釈・授業計画を立てたうえで、実習生同士で話し合い、楽曲解釈、指導言、指導法について協力しながら模索した。また、生徒の反応を見ながら、指導言を言い換えたり、進度を変更するなど、状況に応じた授業展開を心がけた。
- ・どれくらいのテンションで授業をしたら、生徒が興味を示してくれるか、9月実習で把握して、10月実習に生かすことができた。

附属中・高等学校と附属三原中学校の実習グループに関しては、各附属学校の事情が影響していることが考えられる。附属中・高等学校は、中学校3学年分各3クラスずつと高等学校2学年分各2クラスずつの音楽科授業があり、また授業内容も多岐にわたることから、実習生が様々な課題を解決するだけの経験の場が確保されている。一方、附属三原中学校は、中学校3学年分各2クラスの音楽科授業しかなく、実習生は課題を把握するものの、それを解決するだけの経験の場を得ることができない。

附属東雲中学校と附属福山中・高等学校の実習グループに関しては、時間数の差はそれほどない。附属東雲中学校も3学年分各2クラスしかないが、合唱コンクール前ということ配慮して特別な時間割が組まれており、音楽科授業は多く設定されている。このグループの特徴的なことは、附属東雲中学校では、合唱指導を通じて、生徒の状況に応じて臨機応変に対応する力に課題があることが認識され、附属福山中・高等学校では、教材研究や授業計画に課題があることが認識されていたということである。

#### (2) 生徒からの評価コメントの成果

以下に、実習グループ別の自由記述をまとめる。

#### 【附属中・高等学校と附属三原中学校】

- ・次の授業のモチベーションになった。どこが生徒にとって難しいのかがわかり、次時の授業を構想しやすくなった。
- ・自分たちだけでは気づかないことを指摘してくれることもあった。また、実際の中学生在がどのように感じている

かも知ることができた。次の授業に生かせるヒントがたくさんあった。

- ・授業者と生徒との間のギャップを知ることができた。こちら側が授業のなかで身につけさせたい目標と、生徒自身が「学んだ」と感じたことのずれが生じていることがあった。目標設定の仕方や、授業の時間配分などの工夫に役立った。楽しかったというコメントが毎回の授業のモチベーションをあげるのに役立った。
- ・授業をしながらでは気づけなかった反省点（声の大きさ、話し方）など、次時に生かすことができた。生徒の注目している点、興味の対象が把握できたため、授業構成に役立った。
- ・そっけない反応だった生徒のなかにも実は興味をもって音楽を楽しんでいた生徒がいたとわかって、励ましになった。
- ・生徒の生の声を聞くことができたので、客観的に自身の授業を振り返ることができた。ある特定の活動が生徒にどんな反応を与えるのかを知る材料となった。
- ・何ができるようになった、何が分かったというように、その授業での成果を書いてくれる生徒が多く、やりがいを感じることもできた。また、分かりにくかった点などを指摘してくれた生徒もいたため、悪い部分を自覚し、次の授業に生かすことができた。
- ・生徒の立場に立って授業づくりをしていかなければならぬと改めて思う機会になった。それからは、指導案を考えるとときも生徒の動きをよく考えるようになった。どのような場面で生徒のやる気が出たり出なかったりするのかがわかるようになり、次に生かすことにつながった。
- ・自分が授業で行った技術的な指導がどのくらいわかりやすかったか、生徒が授業をどのくらい目標を意識して望んだのか、また達成できたか、などを知ることができ、自分の授業の反省に役立ち、次の授業に生かすことができた。

#### 【附属東雲中学校と附属福山中・高等学校】

- ・実習生目線で行う反省会だけでは得ることのできない、生徒目線の実際のコメントがたくさんあったので自分の特徴を客観的な視点から見つけることができたと思う。
- ・自分では気づかないことや、他の実習生からも指摘がないものに対しての意見が多くあり、参考になった。次の授業への課題となったので貴重だった。
- ・授業のねらい、目的を達成することができたかどうかを確認できたのでよかった。生徒にとってわかりやすいと感じた指導のしかたを実習生全員で共有でき、それを自分の引き出しの1つにすることができた。
- ・自分たちや先生からの反省では気づけなかった生徒目線の意見を得たことによって、自分への明確な課題を認識できた。生徒との距離が近づいた気がする。
- ・口調や話が長くてわかりにくいといった内容が生徒から多くあげられ、気をつけなければならないと強く感じ、意識するようになった。
- ・自分の課題、よい点、くせなど、客観的な意見を知ることができ、次の授業ではこうしようという準備ができた。少し心が折れそうになることもあったが、むしろやる気につながった。
- ・生徒からの感想は、自分がうまくいかなかったと感じたものが挙げられていたのはもちろん、自分では気づけなかった振る舞いが生徒にはこう伝わった、というものもあった。授業をする際の言動や表情について、生徒は本当によく見ているということ、自分のなかの基準程度の配慮では足りなかったことに気づかされた。

- ・教える側からではなく、教えられる側からのコメントにより、何がわかりやすくて、どのような指導がわかりにくいのか明確にわかることができた。もらったコメントを次の授業で生かすことができ、また自分の課題を見つけることができた。
- ・東雲では、前半は実習生を絶対評価的にみたコメントカードを書かせたが、後半は、松前先生と実習生を比べてどうだったかという感想を書かせた。生徒にこちらの熱意が伝われば、生徒も受け入れてくれると感じた。しかし、松前先生と比べると、指揮の技術や指導がはるかに劣っており、生徒の得られる有能感・達成感も低いことがわかった。指導によって、時には指揮でひっぱりながら歌わせることで、生徒は気持ちよく歌うことができるのだとわかった。
- ・わかりやすかった点と、もっとこうしてほしい点を明記してくれたので、課題と長所を客観的に知ることができた。これは分かって、これはわからないというのを、生徒の声として知ることができた。

生徒からの評価コメントの成果として、①授業者側からは気づけない課題を学習者側から提示されたこと、②授業のねらいが伝わっているかどうか、及び達成度の実際が分かったこと、③授業計画、指導方法の改善に繋がったこと、等が挙げられる。（三村真弓）

## 5. 実習生の自己評価表の分析と考察

### (1) 自己評価表の概要と分析対象

自己評価表は、①教科内容に関する知識・技能、コミュニケーション力、指導の柔軟性、省察の意欲、勤務に対する自信などの「実習全般に関する教師力」（全14項目）について問う評価表と、②学習者に学習成果を達成させる能力と実習生の指導技術に関する能力などの「音楽科の授業に関わる教師力」（歌唱・器楽・鑑賞の各領域を対象に全24項目）について問う評価表、の大きく2種類で構成した。どちらの自己評価も実習前・1校目実習後・2校目実習後の計3回にわたって実施した。

分析対象としたのは、附属中・高等学校（図中では広島と略記）と附属三原中学校の組み合わせによる実習生5名、附属東雲中学校と附属福山中・高等学校の組み合わせによる実習生7名の、計12名であった。ただし、②「音楽科の授業に関わる教師力」の評価表では、欠損値が多かったため歌唱領域に限定した。さらに評価表の不備によって2校目実習後のデータから附属福山中・高等学校を除外した。

### (2) 実習全般の教師力について

実習全般に関する自己評価について、全14項目のそれぞれについて得点の平均値を算出し、実習前・1校目実習後・2校目実習後を比較した（図1）。すべての項目において、実習前の得点が最も低く、1校目または2校目の実習後に得点が上昇している。実習前に

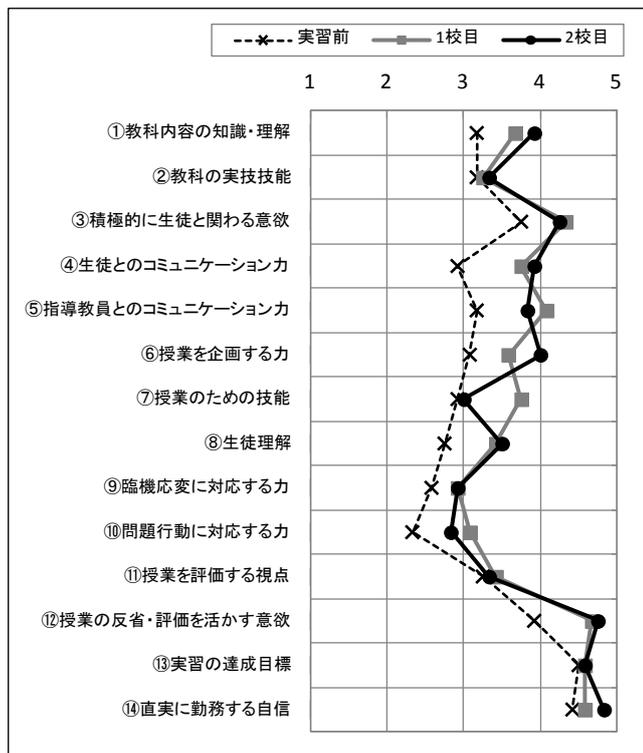


図1 実習全般の自己評価結果

は実習生は様々な不安を感じている。具体的には、大学で学んだ教科の知識や技能が実践のなかでどの程度使えるものなのかといった不安、これまでに模擬授業等でシミュレーションはしているものの生徒を目の前にして教師としてうまく振る舞えるかどうかといった不安、あるいはこれまでに実習観察等で得た教職に対するイメージが実習のなかで目の当たりにする現実とうまく重なるかどうかといった不安などである。これらの不安から、実習前の得点は総じて低いものとなっている。しかし、1校目または2校目の実習を経て、予想していた不安は現実のなかで程度減少し、実習全般で求められる教師力が予想よりも高いものではないことに気づき、事前のイメージと現実との間で自己調整をしていることがうかがえる。

実習前・1校目・2校目で得点があまり変わらなかった項目は、②教科の実技技能 [3.17→3.25→3.33]、⑪授業を評価する視点 [3.25→3.42→3.33]、⑬実習の達成目標（高めたい力など）[4.50→4.58→4.58]の3項目であった。②教科の実技技能と⑪授業を評価する視点はどちらも3点台であり、あまり高くない。つまり、これらの能力については実習の前後で飛躍的に向上が期待されるものではなく、普段の長期的な学習や実践経験のなかで徐々に形成されるものであると言える。⑬実習の達成目標は4.5点以上の高得点で推移しており、実習生は常に「こうありたい、こんなことができるようになりたい」といった教師の理想像を描

ていると言える。

実習前後で得点が向上するものの全体的に得点が低かった項目は、⑨臨機応変に対応する力 [2.58→2.92→2.92] と、⑩問題行動を起こす生徒へ対応する力 [2.33→3.08→2.83]の2項目であった。実習前のイメージよりも実習のなかでその具体を把握することができたというレベルであり、実際にはこれらの能力は実習中においても獲得が困難であることが予想される。もちろん、実習校によってはこれらの項目に該当する場面にそもそも遭遇しなかった可能性もある。

1校目で得点が高くなったのに関わらず、2校目で低下した項目は、⑦授業のための技能（板書など）[2.92→3.75→3.00]であった。1校目から2校目にかけて0.75点も低下してしまっ。1校目では板書等の技能を高めることができたが、2校目ではそれらの機会がなく、その結果、教師力として低い評価をしたか、実習の深まりに応じて、実習生自身の評価基準が厳しくなったことが考えられる。実習先では設定された学習内容や学習環境でトレーニングを積むわけであるが、実習内容・環境に関わらず教師として必要な能力を可能な限り網羅するようにトレーニングできる実習環境の整備が必要であるかもしれない。

### (3) 音楽科の教師力について

音楽科に関する自己評価について、歌唱領域に限定したうえで、「学習者の学習成果」「指導者の指導技術」の2つの教師力ごとに得点の平均値を算出し、実習前・1校目実習後・2校目実習後を比較した(図2)。

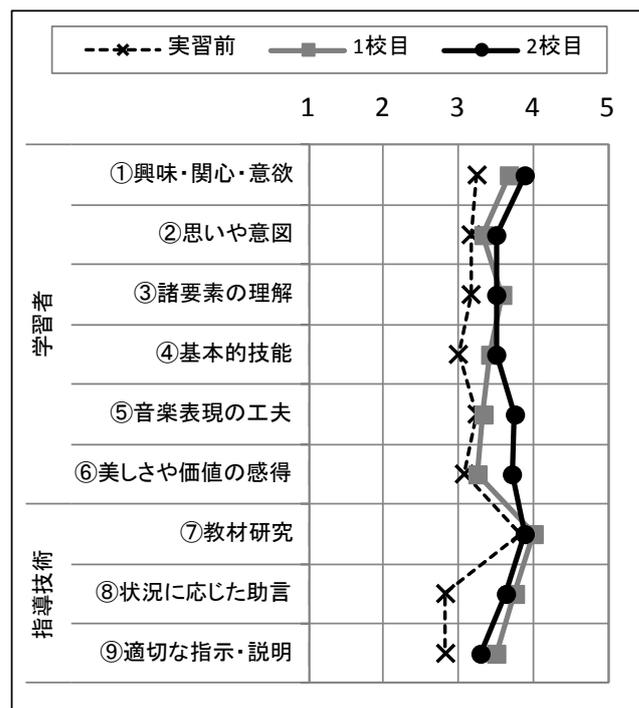


図2 音楽科の自己評価結果 (歌唱)

学習者に学習成果を達成させる能力については、概ね実習前から実習後にかけて得点が上昇していた。実習前から2校目の実習後に0.5点以上高くなった項目は、①歌唱に興味・関心をもちせるとともに、意欲的に取り組ませることができた [3.25→3.67→3.88]、④歌唱の基本的な技能を身につけることができた [3.00→3.42→3.50]、⑤歌唱の基本的な技能を生かして、楽曲にふさわしい音楽表現を工夫させることができた [3.25→3.33→3.70]、⑥楽曲の楽しさや価値を感じさせることができた [3.08→3.25→3.71] の4項目であった。

実習生の指導技術に関する能力については、まず実習前後で大きく得点が上昇した項目は、⑧教師の一方的な説明ではなく、生徒の反応や状況を見ながら、適切な助言をすることができた [2.83→3.75→3.63] であった(前後の得点差は0.79点)。その時々状況に応じて臨機応変な振る舞いが果たしてできるのか不安を抱く実習生は多く、実習前の得点は低かったが(2.83点)、実際に実習をするなかで生徒の言動を捉えて行動するコツをつかむことができ、実習後の得点が上昇したと言える。一方で、実習前後で、比較的高得点のまま変化がなかった項目は、⑦楽曲について十分な教材研究を行うことができた [3.83→4.00→3.88] であった。教材研究は授業実践前にあらかじめ行うため、生徒の即興的な反応と切り離されるといってあまり不安要素がなかったのか、実習前においても得点が比較的高く(3.83点)、1校目、2校目ともに横ばいに推移している。

各実習校には、前述したようにそれぞれに特有の学校の雰囲気があり、実習内容や教師の音楽教育観も異なっている。では、実習グループによって、実習生が獲得した音楽科教師力に相違はあるのだろうか。音楽科に関する自己評価を実習グループ別に比較し、実習前・1校目実習後・2校目実習後ごとに整理した(図3～5)。

図3から、実習前に実習生がもっている教師力にはグループ間で大きな差は見られない。1校目実習後(図4)では、部分的にグループ間に差が生じている。例えば、④歌唱の基本的な技能を身につけさせることができた、⑥楽曲の楽しさや価値を感じさせることができた、などである。これらの項目は、2校目実習後(図5)にはさらにその差を広げ、とりわけ⑥の楽曲の楽しさや価値の感得については両極とも言える得点差を呈している。ここでの附属東雲中学校と附属福山中・高等学校のグループには自己評価表の不備から附属福山中・高等学校のデータを含んでおらず、附属東雲中学校1校のみの得点となっている。④と⑥のいずれも

附属東雲中学校の得点が低いのは、附属東雲中学校で課題とする実習内容が、合唱コンクールに向けた極めて高度な合唱曲の総仕上げの指導であり、実習生にとってハードルが高かったことが読み取れる。それに付随して、⑦教材研究の得点が4.33点と極めて高いことも、ある意味必然と言えよう。

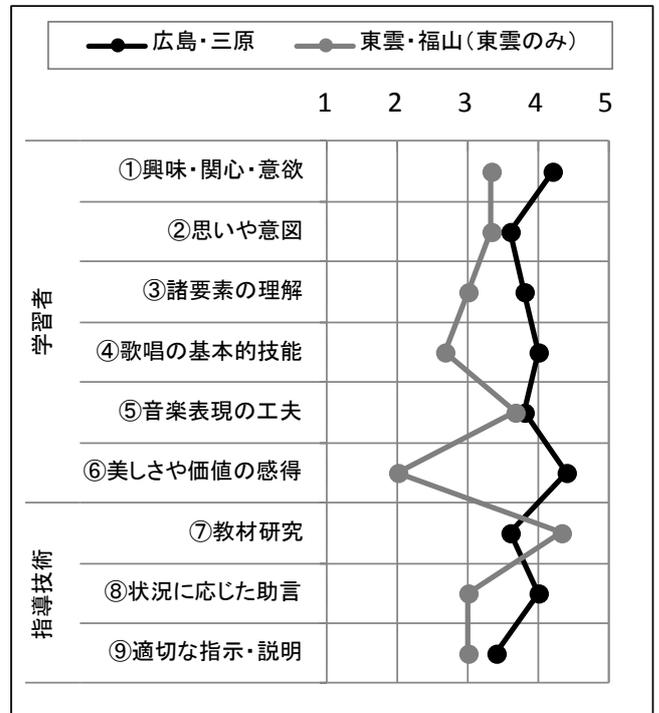


図3 実習グループ別比較 (実習前)

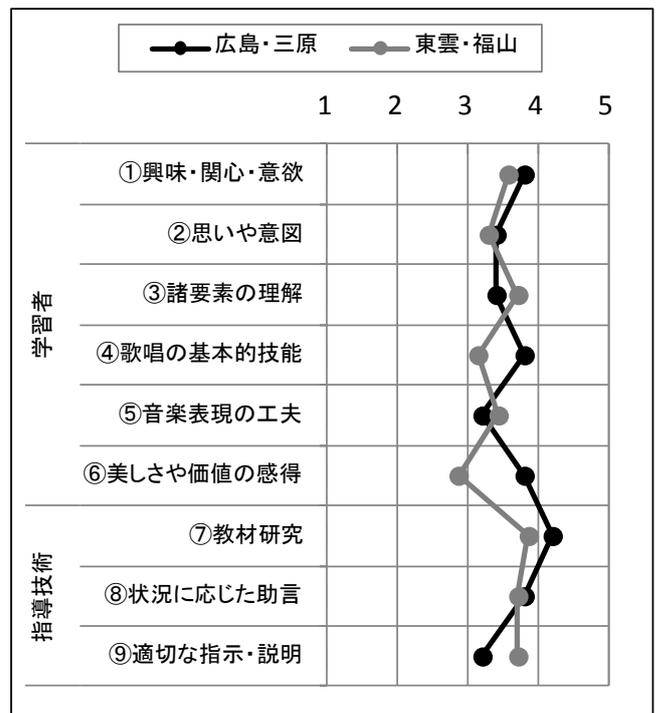


図4 実習グループ別比較 (1校目)

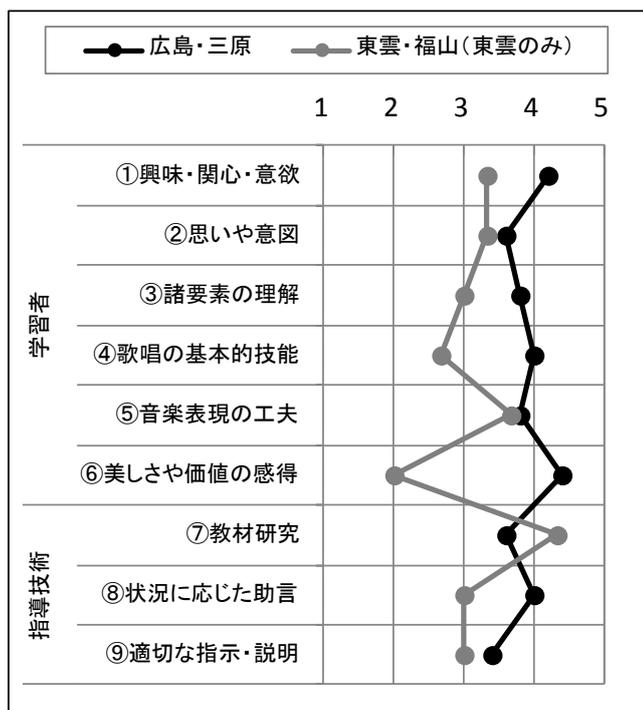


図5 実習グループ別比較（2校目）

このように、図3～5からは2校目の実習を終えた時点で、実習グループによって獲得できた教師力は一様ではないことがわかる。しかし、実習生は「そのときの」実習校における自己評価をしている可能性が高く、実習全体を通して総合的にどの程度の教師力が獲得できたかはここでは言及できない。（伊藤 真）

## 6. 総括と今後の課題

本研究を通して、実習生が多面的に目標をもって実習に取り組むことができ、その結果を数値として確認することができたことや、本研究の2観点「生徒の学習意欲を高めることができたか」「音楽の授業の質は高いものであったか」について、実習生と指導教員ともに意識して教育実習にあたることができたことは1つの成果であった。また、研究にあたって、附属学校4校の教員が相互に日頃の実践や実習の様子について情報交換することができたことも新しい一歩であった。

今後は、各校の特色を保ちつつ、附属4校と大学とで連携して、実習生が獲得する教師力ができる限り多面的に網羅されるように工夫していくことが課題であろう。（増井知世子）

### 引用（参考）文献

- 1) 中央審議会（2006）「今後の教員養成・免許制度のあり方について（答申）」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm)  
 (2015.1.25 取得)
- 2) 三村真弓, 他 (2014) 「各教科（校種別）の授業研究を通じた教職・教科内容の連携・教員協働の在り方に関する研究（2）」『共同研究プロジェクト報告書』第12巻, 広島大学大学院教育学研究科, pp.107-122.